OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヨーロッパから見た中国思想 ： 19世紀イエズス会士アンジェロ・ゾットリによる『易経』翻訳を中心に
Author(s)	
Citation	令和7（2025）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2026
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.7

令和７年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	たかぎ　こうき 髙木　洸希	学部 学科	文学部人文学科	学年	３年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	辛　賢	所属	人文学研究科（文学部）		
研究課題名	ヨーロッパから見た中国思想―19 世紀イエズス会士アンジェロ・ゾットリによる『易経』翻訳を中心に				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

はじめに

16～18 世紀、イエズス会は中国布教にあたり、現地の思想・宗教にキリスト教を適応させる「適応政策」を採用し、その一環として儒教古典の翻訳・研究を進めた。これにより中国哲学の情報がヨーロッパに伝わることとなった。ミケーレ・ルッジェリ『大学』訳（1592)、マテオ・リッチ『天主実義』(1603)、フィリップ・クプレ『中国の哲学者孔子』(1687）などはその代表例である。しかし、この適応主義に対して他会派が「中国の儀礼は異教的である」と批判し、典礼論争が生じた。その結果、イエズス会内部でも中国思想をキリスト教的価値観よりも、東西共通なる普遍理性の観点から捉えようとする傾向が現れ、フランソワ・ノエルの『中華帝国の六古典』(1711）や、19 世紀のアンジェロ・ゾットリによる『Cursus Litteraturae Sinicae：Studium Classicorum（中国学教程：古典研究)』(1880）出版へとつながった。

井川義次（2009）は、クプレの『中国の哲学者孔子』が明代の張居正『四書直解』『易経直解』を経典解釈における主要な指標とした点に注目する。クプレは宋明理学を「純粋な儒教ではない」と退け、張居正の注釈に見られる神の能動性や理性・道徳的実践の強調を高く評価した。また『易経』訳では「謙」卦にとりわけ詳細な説明を施した。張居正の注釈に拠ることで、「天」や「鬼神」が謙遜な者を賞賛し恵みを与えるという主体的な性格を持っていたことや、また謙遜の徳が中国思想においても重要視されていたことなどを強調し、キリスト教との親和性を示そうとしたと指摘されている*1。

クプレと同様に宣教師として来華し『易経』の翻訳を行ったのが、アンジェロ・ゾットリ（Angelo Zottoli 晁德蒞 1826–1902)である。アントニオ・デ・カロ（2022）によれば、ゾットリは 1848 年に中国・徐家匯へ派遣され、宣教活動と併行して教育・研究に従事したという。聖イグナチオ公学や徐家匯書院が建つこの地は、若い宣教師への中国語・中国思想教育の場であると同時に、現地の中国人に学習機会を提供する場でもあった。ゾットリはそこで二つの著作を残した。一つは宣教師のための教科書『Cursus Litteraturae Sinicae：Studium Classicorum（中国学教程：古典研究)』(本報告書

*1 井川義次『宋学の西遷―近代啓蒙への道』人文書院、2009 年、13~19 ページ,44~54 ページ

では『中国学教程：古典研究』と称する)であり、儒教古典のラテン語訳や語彙・概念の解説が収められていた。もう一つは『取臂訓蒙』といい、中国人学生のためにカトリック教義を説いたものであった*2。

『中国学教程：古典研究』における『易経（Mutatiorum Liber)』はその中間部に置かれ、六十四卦および『繫辞伝』『説卦伝』『序卦伝』『雑卦伝』など十翼の大部分を含む。その研究は十分とはいえず、とりわけゾットリの思想的立場において検討の余地がある。クプレ訳に対する井川（2009）の指摘のように*3、ゾットリ訳にはキリスト教的意図が潜むのか、それとも当時の潮流に沿う形で普遍性・合理性を志向した訳となっているのかが問われる。

そこで本研究では、『易経』について漢文とラテン語訳文との比較を通じて、ゾットリの依拠した注釈・思想的立場を分析し、その翻訳意図を考察する。

本研究の計画段階においては、ゾットリ訳『中国学教程：古典研究』に収録されている『易経』に関する翻訳姿勢を多角的に検証することを目標とした。具体的には、初期の計画では、ゾットリ訳『易経』の中でも特に重点的に取り上げられている八つの卦――乾・坤・屯・蒙・需・訟・謙・遯――の記述を精査し、その和訳を試みる予定であった。

そして、この和訳を基に『易経』に関する主要な漢籍（注釈書）と比較を行い、ゾットリが依拠した注釈の系統、または意図的に改変・強調したと考えられる箇所を特定する分析を前半の課題とした。後半では、さらに時代背景と翻訳史的観点から、ゾットリに先立ち 17 世紀に『易経』をラテン語に翻訳したフィリップ・クプレによる訳本（『Y-king』）との比較を行う計画であった。訳出箇所の選定や記述内容の相違点・類似点を分析することで、それぞれの訳者の立場や翻訳方針の違いを明らかにするのが当初の目標であった。

しかし研究の実行段階において、初期計画の達成には二つの課題が存在することが判明した。

第一に、多くの卦を対象とした比較分析を進めるには、研究者自身が漢籍としての『易経』の原文と主要な注釈の内容を十分に理解することが優先すべき課題であると認識された。

第二に、『中国学教程：古典研究』の「序文」を精読した結果、ゾットリが彼の『易経』解説において朱熹の注釈に依拠していることが明確に示されていた。この事実は、広範な注釈比較を行うよりも、まずは朱熹の『周易本義』とゾットリ訳との対応関係を厳密に検証することを不可欠とした。

これらの理由から、本研究は計画を修正し、広範な比較研究から限定的かつ集中的な読解・分析へと焦点を絞ることとした。具体的には、『易経』の核心をなす乾卦に限定し、漢籍（主に朱熹の『周易本義』）とゾットリ訳との記述を詳細に読解・分析することに注力した。

以上、研究目的と研究計画、経過、方法を明らかにした。以下に本研究の成果報告として、まず『中国学教程：古典研究』「序文」の分析を通じて、ゾットリの教育的・学術的な立場を明確にする。次いで『易経』乾卦における朱熹『周易本義』とゾットリ訳との比較・検証により、前項で提示したゾットリの朱子学依拠という論点を論証することとする。

１．中国古典解釈におけるゾットリの学術的立場

ゾットリの『易経』解釈が具体的にどの注釈書に依拠しているのかは、最も重要な関心事である。『易経』訳が収録されている『中国学教程：古典研究』「序文」において、彼は以下のように述べてい

*2 Antonio De Caro『Angelo Zottoli, a Jesuit Missionary in China (1848 to 1902): His Life and Ideas』（Christianity In Modern China)、Palgrave Macmillan、2022

*3 井川義次『宋学の西遷―近代啓蒙への道』、44~54 ページ

る。

さて翻訳に関して言えば、どの解釈に従うべきかという点については、迷う余地がない。というのも、朱熹先生（Doctoris enim Tchou hi）は全国民が学問の最高権威として仰ぐ人物であり、その注釈書は誰よりも広く読まれているからである。そして現王朝では、科挙受験者も必ずそれに従うことになっている。さらに、その注釈をより明確にするため、多くの「講章（Kiang tchang）」と呼ばれる、注釈書をさらに解説した本が学校では一般に用いられ、［朱熹の］見解を展開し説明している。私はこの人物［朱熹］と、そのように解き明かされたもの［注釈］に従う。そして、「理学（rationalista）」の大御所としての彼の名が、あなたに影を投げかけない［朱熹の解釈を読み取る際に偏見を与えない］ように、朱熹の中の二つの側面を区別して考えてほしい。私は哲学者（philosophum）としての彼を嫌悪しているが、文献学者（philologus）としての彼を愛している。ゆえに、若者が学ぶ書物については、もしその［哲学的］誤りが入り込んでいるなら、それを取り除いたものであってほしいと思う。しかし彼の文献学者としての純粋な注釈については、その権威と学識ゆえに、私は他のもの［他者の注釈］より当然に優先［して採用］する。

（『中国学教程：古典研究』「序文」第二節*4）

ゾットリは朱熹が当時の学問の最高権威であり、その注釈書が最も広く普及していること、そして科挙のテキストとして朱熹の解釈が採用されていることなどを理由に挙げて、彼の注釈に従うことを表明している。しかしここで注目すべきは、ゾットリは朱熹の「文献学的」古典解釈に限り支持しているのであって、「理学的」「哲学的」な側面はむしろ嫌悪しているという点である。ゾットリの『中国学教程：古典研究』には『四書』と『易経』が収録されており、それらがいずれも朱熹の注釈を第一に採用していると推察するが、そこにおいて「形而上学的」な理気論を好まず、朱熹の原文に忠実に解釈している側面を取り上げて評価しているということである。

もっとも、それ［文献］から語句の力や表現の意味を汲み取る際、原文が難解であればあるほど、逐語訳の方法から（a litteralis versionis methodo）離れるのが適切である［場合によっては意訳も必要である］と判断した。確かにこの方法［逐語訳］は時に明晰さを損なうこともあると私は知っている。というのも、語句の構造は明確でも、著者の意図することが必ずしも同じようには理解されない［明確にはつかめない］からである。しかし、［逐語訳・意訳］両方の利点を確保し、両方の欠点を取り除くことが私の課題であった。真剣にその道に入り、継続的な集中力をもって個々の段階を踏破する知性にとっては、どのような文章でもその意味を理解できないものは存在しないだろうと私は考える［学習者は誰であっても、真剣に学問に取り組み、継続・集中して一語一語読み進めれば、どのような文章に対してもその意味を理解することができると、私は考える］。それでもし万が一、私の意図に反してそれ［どうしても理解できない部分］が誰か［学習者］に対して生じたのなら、それはただ、その人の理解を助けるべき必要な注釈が不足しているのだ［訳文そのものや学習者の能力に問題があるのではない］と結論づけるべきである。しかし、ただ逐語訳のみという方法が翻訳者にとって難しいとしても、学習者にとってはこの上なく

*4 訳出にあたって、特徴的な用語については（）内にラテン語表現を、内容理解のために補足が必要だと判断した箇所には［］内に意訳・解説を付した。以下、ラテン語文の訳出においては同様の形式をとることとする。

適した方法である［逐語訳のみでは適切に翻訳するのが難しいため意訳も用いるべきであるが、学習する際には逐語訳された文章を用いるほうが良い］という考えだけは、揺るがないものである。(『中国文学教程：古典研究』「序文」　第二節)

朱熹の「文献学的」な側面を評価するゾットリは、彼自身の翻訳姿勢についてもできるかぎり原文に忠実に行うよう努めている。ゆえに逐語訳を最良と位置づけたうえで、原文の難解さを考慮し必要に応じて意訳を取り入れるべきと述べている。この「序文」の内容からは、ゾットリが努めて当時の現地での一般的な解釈に倣い、朱熹の解釈に忠実に翻訳しようとしていたことがうかがえる。

17 世紀のクプレは宋学を「純粋な儒教ではない」として否定し、来華当時・清朝康熙帝の時代に広く流布し、評価されていたという張居正『直解』を採用した。一方で 19 世紀のゾットリは朱熹の解釈を支持していたが、こちらも当時の正統学派であったことが理由の一つとして挙げられている。クプレとゾットリは、ともに当時の社会的な支持を集める注釈書（クプレは張居正『直解』、ゾットリは朱熹『周易本義』か）を採用し、現地における共通認識の形成を目指すという戦略的な共通点を有していた。しかし、この選択の根本的な狙いと時代背景は大きく異なっている。クプレの時代はイエズス会による適応政策の途上にあった。そのため、井川（2009）が指摘するように、彼は中国思想の有神性を見てキリスト教との融和性を見出そうとする狙いから翻訳を行い、ヨーロッパに向けて中国哲学の情報を伝える義務を負っていた。したがって、その思想をヨーロッパ（キリスト教）の文脈に寄せていく必要があった。一方、ゾットリの時代は既に適応政策が終わり、中国思想の中に東西共通の普遍的・合理的なものを見出そうとする風潮が起こっていた。このため、彼は教育者として若手宣教師に向けて中国思想を紹介するにあたり、あくまで当時の解釈に忠実に訳すことを最上とし、思想を現地の認識に正確に合わせることが求められていたのである。

２.『易経』「乾」卦における朱熹とゾットリの解釈

〔乾卦　卦辞〕

乾は、元いに亨る、貞しきに利し。

(『周易本義』にある朱熹注)

此の卦は六畫皆奇にして、上下皆乾たれば、則ち陽の純にして健の至れるなり。故に乾の名、天の象は皆易わらざるなり。元亨利貞は文王系くる所の辞なり。一卦の吉凶を断じて以て所謂彖辞なる者なり。

元は、大いなるなり。亨は、通るなり。利は、宜しきなり。貞は、正しきにして固きなり。文王以為らく乾道は大いに通りて至正なるが故に、筮に於いて此の卦を得て、而も六爻皆変ぜざる者は、其の占当に大いに通り、而して必ず正固に在るに利を得て、然る後に以て其の終を保つべしと言うなり。　　(『周易本義』乾卦　朱熹注)

卦の六画の記号は、上下三画ずつの卦（上卦、下卦）の組み合わせで成り立っている。ここではまず六画が全て陽爻であるために、上卦が乾で、下卦も乾であるといえる。これは陰陽でいえば純粋な陽であり、健やかなる極みである。それゆえ六画の卦もまた「乾」といい、天を象ったものである。以下は乾卦の徳について「元亨利貞」の四徳として解説する。「元」は万物の始めにして偉大であるさま、「亨」は万物のはたらきが行き渡り、広く浸透するさま、「利」は物事のそれぞれ宜しきところを得る（本来のあるべき性質を与える）はたらき、「貞」は正しさを得てそれを堅持するはたらきであ

る。この解釈は後の彖伝において、その本文でも詳説されている。

また、朱熹はその注釈の中で「この卦にあたった場合は、望みは大いに通る。正しさを保っていれば利益がある」という占辞を示している。周の文王が作ったとされる卦辞だが、本来はただ占いの答えとして「元いに亨る、貞しきに利し」と読むべきものであった。それが後に彖伝・文言伝を作った孔子が「元・亨・利・貞」の四徳に分けて解釈し、『周易正義』を著した孔穎達、さらに北宋の程頤（伊川）などの注釈において、「元亨利貞」の四字にそれぞれ形而上学的な解釈が加えられることとなった。それに対して朱熹はこの一句を占いの書としての本来の役割に立ち返り、純粋に占いの言葉として読んでいるのである*5。

それではこの卦辞をゾットリがどのように解釈しているのか確認する。

〔乾卦　卦辞のラテン語訳〕

COELI EMBLEMA.

GEMINATO OBLI TRIGRAMMATE CONSTANS, PRINCIPISQUE EXHIBENS PERFECTIONES.

天の象

二重になった乾の三画で成り立ち、君主の完全さを示す。

Cœli virtus (1), magna, penetrans, conveniens, solida (2).

天の徳は(1)偉大で、浸透し、調和し、堅固である(2)。

（『中国学教程：古典研究』「易経」乾）

ゾットリは「元亨利貞」の四字を乾の四徳として分解して説明していることが分かる。ここでは朱熹注のように四字を占辞として「望みはおおいに通る」とは述べられていない。しかしこの卦辞にゾットリ自らが付した以下の注釈において、「元亨利貞」四徳の性質の詳細とともに、占いの言葉としての説明が付されている。

〔ゾットリによる注釈〕

(1)Hic habentur omnes lineæ perfectæ; recte igitur emblema exprimet cœli virtutem, totumque hexagramma etiam vocabitur K'ien.

(1)ここには、すべての爻が陽爻（lineae perfectae）である。ゆえにこの象は正しく天の力（coeli virtutem）を表し、またこの六画全体（totumque hexagramma）は『乾（K'ien)』と呼ばれるであろう。　（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　ゾットリ注（１））

注釈（１）では「乾」の卦の形状について、経文の訳に繰り返し説明が加えられている。

(2) Magna in procreatione, quatenus omnibus dat originem, 元;；penetrans in actione,亨; conveniens in applicatione, 利; recte solida in effectu,貞: en hexagrammatis definitio.

(2) 生み出すことにおいて偉大である、というのは、万物に起源を与えるからである—これが

*5 『朱子語類』巻第六十七　易三　綱領下「乾之「元亨利貞」，本是謂筮得此卦，則大亨而利於守正，而彖辭文言皆以為四徳。（中略）文王以前只是大亨而利於正，孔子方解作四徳。易只是尚占之書。」

「元」。作用において浸透する―これが「亨」。用いることにおいて調和する―これが「利」。結果において正しく堅固である―これが「貞」。これが六画の定義である。

（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　ゾットリ注（２）第一節）

Sub cœli influxu, res obtinent initium in vere 元, progressını in estate, 亨; debitam perfectionem in autumno 利, soliditatem in hieme 貞: hinc quatuor etiam tempora hic designantur.

天の感化のもとにおいて、万物は春に始まり―「元」、夏に進展を得て―「亨」、秋にふさわしい完成を得て―「利」、冬に堅固さを得る―「貞」。したがってここでは、四季もまた指し示されている。

（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　ゾットリ注（２）第二節）

Cæli imitator est sapiens gubernator, qui humanitate vivificat ortum, ritibus componit evolutionem, sæquitate distribuit cuique jus suum, prudentia confirmat: hinc quatuor etiam virtutes definitio significat.

天に倣う者は賢明な統治者である。彼は仁によって生気を与え（humanitate vivificat ortum）、礼によって発展を整え、公平さ（aequitate）―義によって各人にその分を分け与え、智によって［事を］確立する。ゆえに、ここにおいて定義はまた四徳を意味する。

（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　ゾットリ注（２）第三節）

注釈（２）では、まず「元・亨・利・貞」の四徳のはたらきについて詳説し（第一節）、その後これらを春夏秋冬の四季にあてはめ（第二節）、さらには聖人の徳として「仁・礼・義・智」と対応させた解説を付している（第三節）。この説明の形は、『周易本義』文言伝の朱熹注に見られるものである。

文言に曰く：元は、善の長なり。亨は、嘉の会なり。利は、義の和なり。貞は、事の幹なり。

（『周易本義』文言伝　第一節　【１】*6）

元は、生物の始め、天地の徳にして、此に先んずるは無し。故に時に於いては春と為し、人に於いては則ち仁と為し、而して衆善の長なり。亨は、生物の通るなり。物の此に至りては、嘉美ならざることなし。故に時に於いては夏と為し、人に於いては則ち礼と為し、而して衆美の会なり。利は、生物の遂ぐるなり。物各宜しきを得て、相い妨害せず。故に時に於いては秋と為し、人に於いては則ち義と為し、而して其の分の和を得。貞は、生物の成るなり。実理具備し、随いて各足る在り。故に時に於いては冬と為し、人に於いては則ち智と為し、而して衆事の幹と為す。幹は、木の身にして枝葉の以て立つに依る所の者なり。

（『周易本義』文言伝　第一節　【１】　朱熹注）

君子、仁を体すれば、以て人に長たるに足る。会を嘉すれば、以て礼に合するに足る。物を利すれば、以て義に和するに足る。貞固なれば、以て事に幹たるに足る。

（『周易本義』文言伝　第一節　【２】）

*6 分け方について、「第〇節」は原文に示されている方式であるが、続く「【数字】」は筆者（髙木）が論じるにあたり該当箇所を明確化するために独自で割り振ったものである。

「元」は万物が生じる根源であり、「元・亨・利・貞」四徳の端緒をなすものである。ゆえにそれは四季でいえば春、人道でいえば「仁」であり、善の中でも最たるものである。「仁」は、人が生きていくうえで深く尽きることのない豊かさをもっているため、「仁」によって生気を与えるというゾットリの解釈と合致する*7。「亨」はその成長をたすけるものであり、四季でいえば夏、人道でいえば「礼」にあたる。文言伝本文に「亨は嘉の会なり」「会を嘉すれば、以て礼に合するに足る」とある。夏に草木が繁茂するように、万物が各々の良き時を得て成長し、あるべき姿へと向かっていく。その結果としてあらゆる良きもの、美しいものが集まって流通することができれば、それこそが「礼（＝美的秩序)」にかなうというものである*8。「利」は万物が発生の過程を遂げ、各々その分を得る（あるべき姿を得る）ことである。四季でいえば秋、人道でいえば「義」である。「義」とは物事の区別・分別をつけることで、例として人間関係でいえば、君臣・父子の別を正すことである。文言伝本文に「利は義の和なり」とあるのは、各々の分を越えず互いにその相応しき所に居ることこそが「義」に適っているというのである*9。「貞」は万物の生成において成熟し、真実（中身）を備え、物事をつかさどることができるものである。木に例えれば、枝葉の拠り所となる幹のようなものである。四季でいえば冬であり、人道でいえば「智」である。正しさの在処を知ることで、これを固く守って物事の幹となることができる*10。

また、ゾットリによる乾卦・卦辞の注釈（２）第四節では、朱熹が『周易本義』乾卦・卦辞の注釈で述べていた占辞がまさしく表されている。

> Quodnam vero inde oraculum? oportet obtinere magnam promotionem, in eaque convenienter confirmari.
> さて、そこから得られる神託（oraculum）は何か？ それは、大いなる昇進を得るにちがいなく、その中で［あるべき姿に］適合して、［その正しさが］確立される［強固にされる］べきであるということだ。　　（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　ゾットリ注（２）第四節）

「Quodnam vero inde oraculum?（さて、そこから得られる神託は何か？)」という一文から、卦辞に占いの答えを求めていることが明らかに読み取れる。つまりゾットリは朱熹同様に乾卦の卦辞「乾、元亨利貞」を占いの言葉として解釈していたといえる。またその際に、卦辞に対する訳文ではなく、自身の注釈において朱熹の解釈を明示する形としていることも分かる。

また先述した『周易本義』文言伝、第一節、第一部・二部におけるゾットリ訳を以下に示す。

> Textus verborum significat: magnum, boni incrementum scilicet; penetrans, pulchri collectio;

---

*7 『朱子語類　五』易四　乾上「仁是有滋味底物事，說做知覚時，知覚即是無滋味底物事。仁則有所属，如孝弟、慈和、柔愛皆属仁」

*8 『朱子語類　五』易四　乾上「且以草木言之，発生到夏時，好処都来湊会。嘉只是好処，会是期会也。(中略）蓋言万物各有好時，然到此亨之時，皆盛大長茂，無不好者，故曰「嘉之会」。会是会集之義也。人之修為，便処処皆要好，不特是只要一処好而已。須是動容周還皆中乎礼，可也。」

*9 『朱子語類　五』易四　乾上「義是箇有界分断制底物事，疑於不和。然使物各得其分，不相侵越，乃所以為和也。」、「義之和処便是利，如君臣父子各得其宜」

*10 『朱子語類　五』易四　乾上「貞，正也，知其正之所在，固守而不去，故足以為事之幹。」

conveniens, debiti harmonia; solidum, rerum truncus scilicet.
Sapiens vir informatus humanitate sufficit ad promovendos homines, decoro affluens sufficit ad congruendum ritibus, coaptans res sufficit ad temperandum jura, recto obstinatus sufficit ad fulciendas res: sapiens vir agit has quatuor virtutes, ideoque dicitur ut cælum magnus, penetrans, conveniens, solidus. (4)
本文の語句［元・亨・利・貞］の意味は次のとおりである：「元」とは、善の増大を意味する。「亨」とは、美の集まりを意味する。「利」とは、正しき調和を意味する。「貞」とは、万物の根幹を意味する。
賢者は、仁によって人々を進ませるに足り、美しさ（decorum）に満ちて礼法に適うに足り、物事を調整(coaptans)して法を均しくするに足り、正しさ（rectum）を固くして事物を支えるに足る。　　（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　文言伝第一節）

前半部は「文言に曰く：元は、善の長なり。亨は、嘉の会なり。利は、義の和なり。貞は、事の幹なり。（『周易本義』文言伝　第一節　【１】）」と、後半部は「君子、仁を体すれば、以て人に長たるに足る。会を嘉すれば、以て礼に合するに足る。物を利すれば、以て義に和するに足る。貞固なれば、以て事に幹たるに足る。（『周易本義』文言伝　第一節　【２】）」と内容が完全に一致しており、当該箇所は漢籍（『周易本義』）の経文に忠実な逐語訳であるといえる。ここでは「朱子語類」に述べられているような詳細は語られないが、簡潔で純粋・忠実な訳出がなされているのである。
続く第三節は、注釈の内容において『周易正義』や『程氏易伝』には見られない朱熹独自ともとれる解説が付されている。

君子は此の四徳を行う者なり。故に曰く「乾は、元、亨、利、貞なり」と。
（『周易本義』文言伝　第一節　【３】）

君子の至健に非ざれば、以て此れを行うこと無し。故に曰く「乾は、元、亨、利、貞なり」と。此の第一節、彖伝の意を申べ、『春秋伝』に載する所の穆姜の言と異ならず。疑うらくは古には已に此の語有り。穆姜之を称いて、夫子も亦た取ること有り。故に下文は別に「子曰」を以て孔子の辞を表す。蓋し伝うる者は以て此の章の古語たるを明らかにせんと欲するなり。
（『周易本義』文言伝　第一節　【３】　朱熹注）

君子とは、この四つの徳を実行できる人である。そこで、卦辞では本来「元いに亨る。貞しきに利し」という占辞であった一節を、文言伝では「乾は元・亨・利・貞」とそれぞれ分けて読むのである。これは彖伝の内容を重ねて説いており、また『春秋左氏伝』所載の穆姜の発言とも同じである。

穆姜東宮に薨ず。始め往きて之を筮し、「艮」の八に遭う。史曰く、「是れ『艮』の『随』に之くと謂う。『随』は其れ出づるなり。君必ず速やかに出でん。」と。姜曰く、「亡し。是れ『周易』に於いて曰く、「『随』は、元亨利貞なり。咎無し。」と。元は、体の長なり。亨は、嘉の会なり。利は、義の和なり。貞は、事の幹なり。仁を体すれば以て人に長たるに足り、嘉徳は以て礼に合するに足り、物を利すれば以て義を和するに足り、貞固なれば以て事に幹たるに足る。然る故に、誣うべからざるなり。是を以て随と雖も咎無し。　　（『春秋左氏伝』襄公九年）

文言伝朱熹注の指摘の通り、『春秋左氏伝』の「元は、体の長なり。」から「貞固なれば以て事に幹たるに足る。」までの記述が、『周易本義』文言伝の経文（第一節）と一致する。厳密にいえば、『春秋左氏伝』の「嘉徳は以て礼に合するに足り」が『周易本義』では「会を嘉すれば以て礼に合するに足る」と異なる形で記されているが、大意は通じている。朱熹はこの文の一致を次のように解釈している。『春秋』に「元亨利貞」の文言が載っているということはつまり、孔子が文言伝を作る以前の、古代からすでにこの「元・亨・利・貞」を四徳とする解釈が存在していたことを表しており、穆姜はそれを言い、孔子もまたその記述を利用したというのである。さらにこの一句より後の文には「子曰く」と記されていることからも、それらと区別して「曰く『乾は、元・亨・利・貞なり』」は孔子独自の解釈によるものではなく、それ以前の言葉であることを示しているのである。

この一節についてゾットリは次のように訳出している。

> sapiens vir agit has quatuor virtutes, ideoque dicitur ut cælum magnus, penetrans, conveniens, solidus. (4)
> 賢者はこの四つの徳を実践する。ゆえに彼もまた天のように「元・亨・利・貞」と称される。
>
> （『中国学教程：古典研究』「易経」乾　文言伝第一節）

> (4)Hæc ex antiquo 穆姜 Confucius desumpsisse videtur, ut Wen regis definitionem ad sapientis virtutes applicaret; ad quas et Tcheon Ducis imagines jam jam applicantur, sub ipso 文言 seu scripti textus nomine comprehendendæ. Quod ipsum dein Confucius III° et IVº numero revolvet, III° quidem quo ad imagines, IVº vero quoad definitionem et imagines.
> (4) これらの事柄は、古代の穆姜から、孔子が［それらを］取り出したように思われる。それは、文王の定義を賢者の徳へ適用するためである。その賢者の徳へ、周公の表象も今やまさに適用される。これらは、まさにその「文言」すなわち記された言葉の名のもとに含まれるべきものとして、孔子が第三節（Ⅲ）と第四節（Ⅳ）で再び扱うだろう。第三節では卦象に関する限り、第四節ではしかしながら定義と卦象に関して［扱うだろう］。
>
> （『中国学教程：古典研究』「易経」乾　文言伝第一節　ゾットリ注（４））

ゾットリはここでも朱熹に従い、「乾は、元・亨・利・貞なり」を穆姜の発言から孔子が取り出したものとしている。この解釈を文王の作った彖辞（卦辞）や周公の作った象辞（爻辞）にも適用し、以下に続く文言伝第三節・第四節で説明をするという。『周易本義』における節の区切り方に従うと、この後に続く第二節から第四節まではいずれも象伝の内容を重ねて説くものであり、ゾットリの言う彖辞の記述というのは、第五節に見られる。彼の中での節の組分けが「周易本義」のそれとは異なっていることが分かる。『中国学教程：古典研究』と『周易本義』との各章の対応関係としては、ゾットリ訳では彖伝・象伝を第一節（「Ⅰ」）、文言伝の『周易本義』における第一節・第二節を第二節（「Ⅱ」）、『周易本義』第三節・第四節を第三節（「Ⅲ」）、『周易本義』第五節を第四節（「Ⅳ」）としていた。以下の表にその対応関係を示す。

ゾットリ訳『中国学教程：古典研究』章節	対応する朱熹『周易本義』の章節
第一節（Ⅰ）	彖伝（たんでん）、象伝（しょうでん）
第二節（Ⅱ）	文言伝（ぶんげんでん）の第一節、第二節
第三節（Ⅲ）	文言伝（ぶんげんでん）の第三節、第四節
第四節（Ⅳ）	文言伝（ぶんげんでん）の第五節

朱熹『周易本義』では、文言伝のみ各段落末尾に「右第〇節」と記している。ゾットリも一見この形に従っているように思えるが、その中身は『周易本義』の分け方とは異なり、彖伝以下を独自の分け方によって示していることが分かる。

ここで、一例として『周易本義』文言伝第三節と『中国学教程：古典研究』文言伝第三節（Ⅲ）との内容を比較検討する。

「潜龍用いる勿かれ」とは、下なればなり。「見龍田に在り」とは、時に舎(お)くなり。「終日乾乾」とは、事を行うなり。「或いは躍りて淵に在り」とは、自ら試みるなり。「飛龍天に在り」とは、上にして治むるなり。「亢龍悔い有り」とは、窮の災いなり。乾元の「用九」は、天下治まるなり。

（『周易本義』乾卦　文言伝　第三節）

初九に「潜んでいる龍、行動してはいけない」とあるのは、陽の位があまりに低いからである。九二に「地上に現れた龍が、田にいる」というのは、その徳は現れたが、まだ用いるべき時機でないからである。九三に「君子は一日中努力を怠らない」というのは、君子として為すべきことを行うという意味である。九四に「龍が昇ろうか降ろうか迷いながら、時に躍り上がって、まだ淵の中にいる」というのは、自ら試しに行動してみることである。九五に「飛び上がった龍が天にいる」というのは、人の上に立って政治を行い、天下を治めることである。上九に「昇り詰めた龍は、後悔しなければならない」とは、位が高く極まって、悔いがあるということである。万物の始めである「用九」のはたらきは、天下が治まる道である。君子の道は剛強でかつ柔軟さがあるので、天下は当然治まるのである。

当該箇所のゾットリ訳文を以下に続ける。

〔文言伝Ⅲ〕

Delitescens draco non adhibetur, infernus scilicet. Apparens draco inest campo, tempus inopportunum scilicet.Tota die sollicite cautus, exercet opus scilicet (8). Forte exiliet ex voragine, se tentat scilicet.Volans draco inest cœlo, superne regitat scilicet. Præcelsus draco habebit pænitendum, extremitatis infortunium est. Cœlestis virtus utens novenariis (1), imperium ordinatur scilicet.

「潜んでいる竜が用いられない」とは、地下に隠れている状態である。「現れた竜は野にある」とは、時がいまだ到来していないことである。「一日中、慎重にして警戒する」とは、活動を修めることである(8)。「ときに淵より飛び出すことを試みる」とは、自ら試みるのである。「飛翔する竜が天にいる」とは、上にあって統べるのである。「高く昇りすぎた竜は悔いることになる」とは、極に至る不幸である。天の徳（乾の元）は九（陽）をもって働く(1)、ゆえに天下の秩序が定まる。

（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　文言伝第三節）

〔ゾットリ注〕
(8) Excolit sese.
(8)自らを磨く。

(1) Cœlestis filius robori addens lenitatem.
(1) 天子は剛に柔を加える。

（『中国学教程：古典研究』「易経」乾　文言伝第三節　ゾットリ注）

九三の「終日乾乾」のゾットリ訳は「活動を修める」ことであり、注釈に「自らを磨くこと」とある。『周易本義』には該当箇所には注釈が付されていないが、前段の第二節において「君子は徳に進み業を修む」とあることから、このことを指していると捉えることができる。第三節本文の「事を行う」とは「なすべきことを行う」ことであるが、具体的には前節の心中において忠信を余念ないものとし、言動に配慮して誠を立てることといえる。

また用九の説明において、天徳は剛健さに加えて柔軟さも兼ね備えるものであるという内容があったが、ゾットリ注における「天子（Cœlestis filius）は剛に柔を加える」はそれを踏まえて天徳を身につけた者である「天子」という表現を用いたのであろう。

結論

本研究の読解・分析の結果、ゾットリが『中国学教程：古典研究』を著す際、教育者として若手宣教師に中国思想を正確かつ権威ある形で伝える必要があったため、当時の中国における主流解釈であった朱熹の『周易本義』に依拠し、その解釈に忠実に『易経』乾卦の翻訳・解説を行っていたことが確認された。

しかしながら、本研究は読解・訳出の対象を乾卦に限定しているため、これのみをもってゾットリの『易経』全体に対する立場、あるいは翻訳の根幹にある意図を確定することはできない。

したがって、彼の『易経』解釈の全体像をさらに探るべく、今後は乾卦と対をなす坤卦、そしてより形而上学的意義を濃厚に持つ繋辞伝など、他の重要な篇章を精読・分析することを今後の課題とする。本研究の成果報告は、次なる研究への確固たる基盤を築くものとしてここに結びとする。

【文献一覧】

（史料）
・Angelo Zottoli『Cursus Litteraturae Sinicae：Studium Classicorum』「Mutationum Liber」,1880.
・朱熹選『周易本義』（易学典籍選刊）、中華書局、2009 年
・黎靖徳編『朱子語類　五』（理学叢書）、中華書局、1986 年
・程顥、程頤著『二程集　下』（理学叢書）、中華書局、2019 年

（研究書）
・井川義次『宋学の西遷：近代啓蒙への道』人文書院、2009 年
・今井宇三郎, 堀池信夫, 間嶋潤一『易経・上』（新釈漢文大系 23）、明治書院、1987 年
・堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者・上』明治書院、1996 年

・堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者・下』明治書院、2002 年
・本田済『易経講座・上』斯文会、2006 年